幕末明治の名古屋芝居と地役者の活動

安田徳子

一、名古屋における地役者の発生

名古屋城が築城され、名古屋城下が整備されると、寛文四年（一六六四）には二代藩主徳川光友が橘町裏に常芝居場所を許可している。地方の常芝居場所としては、もっとも早い時期の開設であった。また、『尾陽寛文記』[1]に「一古しへは大須に相模とて金平事、其外きひしき事語し古風の浄留理語り観音堂の後ゟ西北の方に芝居する。見せ物等、外ニ三芝居程もあり。今ハ二王門より東に見ゆる。昔に替りし也。」「大須に笹尾平太夫とて文弥ぶしの名人ありし。後ハ上りて文弥か跡継になりしといへり。」などとあって、大須観音の境内でも寛文年間には芝居場所が造られ、金平や文弥系の浄瑠璃興行が行われていた。この金平の相模屋も文弥の笹尾平太夫も名古屋在の浄瑠璃太夫だったらしい。少し資料が新しいが、『尾張芝居雀』[2]によれば「相模屋　延宝元年浄るり興行、初メ寛文五年願済」、『金鱗九十九之塵』[3]によれば「古へ、此所最初芝居の始りハ、町内に相模善右衛門といへる者有て、初て浄瑠璃芝居興行いたしける故、それより今に名代を相模掾といふ。」とある。同じく『尾張芝居雀』には「和泉屋　延宝三年願済、元禄十三辰二月本芝居願済」の記述もある。これは、和泉十三郎を座本とし、和泉十二郎という人気女方を擁した狂言一座で、『鸚鵡籠中記』[4]『尾陽戯場事始』[5]には、元禄八年（一六九五）から享保一五年（一七二九）にかけて、橘町裏・大須・若宮芝居などで活躍したことが記されている。これによると、古浄瑠璃に基づく独自の狂言を仕組んでいたようで、守屋毅氏[6]も指摘されたように、在地の狂言一座としては、非常に早い時期のものであった。

このように、名古屋に於いては三都以外ではかなり早い時期から在地の役者が一座を組んで活動し、独自の浄瑠璃や芝居を行ってい

た。また、ここで力を得た役者や浄瑠璃語りの中には上方へ上り、活躍する者もあった。しかし、七代藩主となった徳川宗春が享保の改革の最中に、緩和政策を施行して名古屋は全国一の繁昌となり、上方から大歌舞伎の人気役者が来名興行し、在地の一座は圧倒されて活動の場を失ったらしい。和泉屋座や相模屋座の活動記録が見えなくなる。替って、享保一六年からは大須芝居の座本として「和泉屋」の名が見える。和泉屋は歌舞伎一座としては消滅し、和泉十三郎が座本として興行を取り仕切るようになったのだろう。

芝居王国の時代は宗春治世の僅か四年ほどで急展開し、宗春の失脚とともに名古屋では芝居は全面禁止となった。しかし、三年もすると、少しずつ再興の動きが始まる。『尾陽戯場事始』によれば、近江屋与平次率いる一座も、正徳頃から活動していた。これは、矢場町(現、中区大須)に居住して「素人座」と称し、在所を廻っていた。全面禁止後の寛保二年(一七四二)、大須仁王門前で菰葭簀掛けながら、いち早く芝居を復活させたのがこの一座であった。この時の「六歳の小坊主」が後に上方に出て実悪で名を馳せた八塩幾右衛門であったという。さらに『続尾陽戯場始志』[7]では、「尾張名護屋繁花の後、歌舞妓狂言始り」として、寛保三年より七ッ寺境内の和泉屋重次郎を名代とした興行が記されている。残らず地役者で、菰懸、道具立引幕等も無く、綿衣裳、晴天ばかりの興行だったという。続いて、翌寛保四年春には相模座が大須真福寺裏門内で歌舞伎興行を始めた。これもかつての相模屋善右衛門が名代となり、地役者を集めての興行であった。このように、名古屋芝居の復活の芽は地役者によるものだった。宗春の時代、活躍の場を失った地役者だったが、田舎廻りなどで命脈を保っていたのである。こうして芝居興行が復活すると、また、上方から役者が来名するようになるが、宝暦九年(一七五九)五月、和泉屋と相模屋は合体して、「両名代」という独自の形態で大須芝居を経営するようになる。この形態は明治初年まで続き名古屋芝居を支えた。在地の座本や興行主がしっかりしていたことが窺われる。

二、文化文政期の名古屋芝居と地役者

享和から文化初年にかけて、名古屋では五芝居と呼ばれた橘町・若宮・清寿院・大須・稲荷の芝居小屋が新築され、名古屋での歌舞伎興行は再び隆盛を迎える。これ以降名古屋は上方芝居の巡業地として位置付けられ、定期的に上方の大芝居役者が来名興行した。一方、『金明録』[8]には、「橘町芝居にて田舎廻りの役者にて興行。…誠に御講芝居にて論なし」(文化七年一一月二三日、相模屋和泉屋両名代)とか、「若宮にて、小芝居興行」(文化一二年二月朔日、山村甚吉座本)とか、「若宮芝居にて、田舎廻りの役者ニ而興行」(文化

一三年八月四日より、山村坂国一座）といった記述が見られる。これらの中で、若宮の「小芝居興行」は上方芝居に名の見える役者の興行で、上方の小芝居の旅興行と思われる。また、文化七年（一八一〇）橘町興行の役者の中で、嵐金才・谷村団吉などは上方の小芝居に同名を拾うことはできるが、他は名を見出し難い。文化一三年二月若宮興行の役者も、嵐他人や市川三平などは上方に同名の役者を拾うことはできるが、その他の名は見出し得ない。いずれも「田舎廻り役者」と評し、前者は「御講芝居」とも断じているが、やはり上方下りの役者中心の興行だったのであろう。さらに、名古屋五芝居での興行には、「子供芝居」「チンコ芝居」と評されたものも多く見られる。これらの子供芝居もまた、番付に記された役者名の多くは上方の中小芝居に見えるものである。これらも上方下りの興行だった。

ところで、『金明録』文政四年正月一八日条に「大須芝居にて素人まじり、歌舞妓興行。忍術池の狂言に所作事を大切に出す。芳沢円之助平庄弟子由蔵の事也と言女形、ヒイキ多、所作事評判よく大当りにて見物多し。但、山本太一と言医師の弟ニ而泰言と言し者也」とある。また、『尾張芝居雀』には「文政四年辛巳正月十八日より清寿院芝居興行、此節芳沢円之助と云当初の者生所は塩町から上の所、細小路にて、医者ろく（ママ）の悴の由。幼年より御園町三丁目医者若山桃庵の内弟子と成、岱山と云。夫故人々岱山〳〵と斗り云。其後同町ニ罷候振付五九堂平庄（左カ）と云者方にて踊り覚え、又二両年以前より芳沢いろはに随身して、諸国を修行して帰り、此度初めて芝居へ出勤。汐汲の所作事を勤めて、大に評判よく大当なり。二の替に於染之役勤めけれ共、左程になし。」とある。これは番付（国会図書館蔵）によれば、『金明録』のいう大須ではなく、清寿院での山村儀右衛門を中心とした興行で、芳沢円之助の出勤も確認できる。「三月朔日より」も類似の座組興行（竹内文庫蔵番付）が確認できるが、これには芳沢円之助は出ておらず、『尾張芝居雀』にいう「於染の役勤め」たことは確認できない。ただ、右の二書の記述から、芳沢円之助は名古屋出身で、上方の芳沢いろはの弟子となり、今回帰名して、初めて名古屋の舞台に立ったと知れる。しかし、円之助の動向はこの時以外全く手がかりがなく、その後、名古屋で活動したのか、上方に戻ったのかもわからない。いろはに従った時も「諸国で修行」したとあるから、いずれを拠点としても、旅芝居を主としたのであろう。この座組も、山村儀右衛門・中山桶蔵など二〜三人の名は上方芝居に見出せるが、他の者の足跡はつかめない。ただ、沢村三右衛門という名は、文化一三年八月の『金明録』にやはり「田舎廻り役者ニ而興行」と記された若宮芝居にも名が見える。また、『尾張芝居雀』に「若女形にて名を取りし笠寺村の沢村三右衛門も、弘化三丙午年五月十九日病死。葬笠覆寺。」とあるので、在地の役者であったことがわかる。

このように見てくると、文化期以降の名古屋芝居は、東西の大芝居役者の興行の他に、小芝居や子供芝居の興行も行われたが、これ

も上方下り役者を中心とするものだったらしい。しかし、「田舎廻りの役者」とか「御講芝居」と評されるような興行では、他の記録上では確認できないような役者が参加していた。これらが芳沢円之助や沢村三右衛門のような、名古屋を在所とする役者達ではなかったか。次項で述べるように、天保末年以降の名古屋では数多くの地役者の活動が確認できるので、これ以前から地役者が活動していたはずである。名古屋芝居の番付に僅かに一～二度名を残している役者達がこうした地役者達で、彼らは、東西から来名する役者の興行に加わることもあったが、大方は番付に載らないような小詰(端役)で、番付に名が出ることは稀だったのであろう。常は番付も出さない掛け小屋の芝居や田舎廻りで活動を続けていたのではなかろうか。

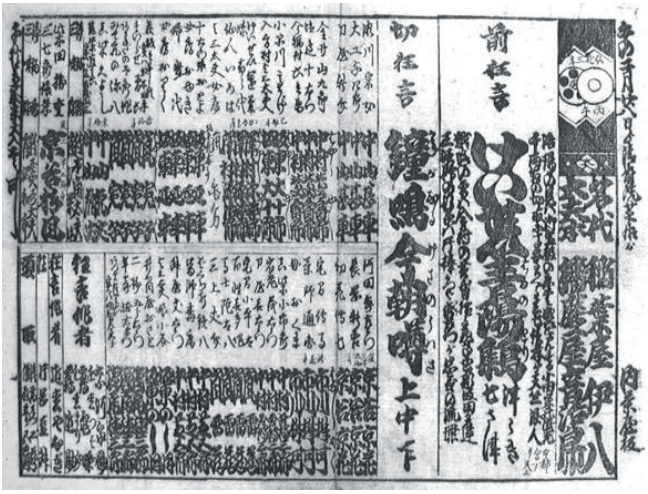
三、天保改革とその後の名古屋芝居

天保一二年(一八四一)から始まった天保改革による三都役者の地方興行禁止令などで、巡業が出来なくなった上方役者の中には、沈滞した三都から尾張近辺に移住して俄地役者と化す者が現れた。名古屋は改革の影響が比較的少なく、改革後もいち早く活気を取り戻したので、そのまま名古屋に住み着く者も多かった。弘化三年六月改『張陽芝居惣者誉角力見立』[9]には、「勧進本」に挙げられた「矢場出生中山文七」、東之方大関の「住吉町出生中村歌七」、西之方大関の「清洲出中村大吉」は出身地を示すだけで名古屋在ではなかったかも知れないが、関脇以下の「下茶屋町中山来助」「日置坂東寿三郎」「古渡市川鯉之丞」「古渡中村かるも」「蓮池中村十蔵」「東田丁坂東大十郎」「古ワタリ市川茂々三」「日置谷村金蔵」、後見として「橘町裏坂東三津太郎」など、名古屋在の役者が並んでいる。さらに、安政六年(一八五九)刊『俳優世々の接木』(俳優堂夢遊編)[10]でも市川新車や中村仲助(寿三郎、仲蔵)、尾上松寿、中山一蝶、尾上いろはなどに「名古屋在」と記されている。これらの中には上方でも名を知られた役者もいるが、天保末年以降の番付によって、右に挙げた役者達の名古屋芝居への出勤が裏付けられる。池山晃氏が紹介された秋葉文庫蔵の名古屋芝居番付の裏書「辰正月より御当地の役者にいたし名計かへ名古屋役者地付芝居相始」(天保一三年五月吉日付若宮芝居)、「是より御主意後当地の役者とゆう者で始て芝居始る」(弘化元年正月吉日付若宮芝居)[11]ではないが、俄の上方下りも「名古屋役者」と称して、地役者とともに名古屋芝居の舞台に立った。その後、上方に帰った者もいたが、すでに報告した尾上松寿や尾上松緑の足跡[12]を見てもわかるように、帰った後も頻繁に名古屋を訪れ、名古屋芝居を主導した。

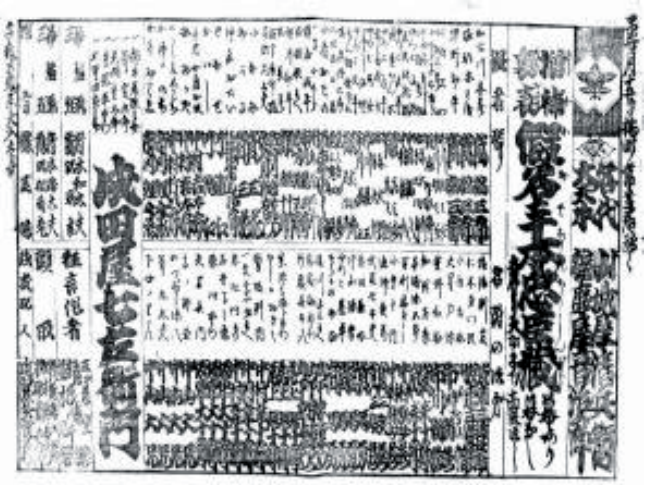
前項で述べた如く、名古屋には在地の役者が相当数居たと類推されるが、その動向を知ることは難しい。上方下りの役者と地役者と

の交流の有無を確認することも容易ではないが、両者の間には明らかな格差があったらしい。ところが、上方役者の名古屋移住によって、両者は同座する機会が増加して、地役者は東西の芝居を吸収した。地役者の中には、前述の芳沢円之助のように、来名した役者と師弟関係を結ぶ者も現れた。例えば、右の『張陽芝居惣者誉角力見立』の前頭筆頭に記された坂東大十郎は、『尾張芝居雀』によれば、はじめ嵐簑助(巳之助)と名乗った地役者だったが、来名した四代目坂東三津五郎の弟子と成って、弘化三年(一八四六)二月二八日よりの清寿院芝居、浅尾徳三郎・坂東のしほ一座で「此度初めて黒人役者の中に入りて初めて狂言をなす」こととなった(番付①)。大芝居役者と師弟関係を結ぶことで一人前の役者と認められ、上方下り役者と同座できたのである。大十郎はこの後、若宮芝居に嘉永三年(一八五〇)まで継続的に出勤したことが番付から知られる。弘化三年一一月の若宮芝居「ひらかな盛衰記」「義経千本桜」「鏡山旧錦絵」では、庵枠に書かれ、「船頭雲右衛門」「すしや弥左衛門」「局岩ふじ」を演じているなど、在地役者の興行では主要な役割を占めたと思われる。嘉永五年(一八五二)七月の橘町芝居、成田屋七左衛門を名乗った七代目団十郎の興行(番付②)にも加えられている。これ以降、名古屋の興行に名が見られないが、安政四年(一八五七)正月刊の評判記[13]『役者都名所』の「名古屋役者目録」の「立役之部」に名が見えるので、存在は確認できる。その後、全く動向が確認できないので、おそらく明治を待たずに亡くなったのであろう。

ところで、坂東大十郎が参加した七代目団十郎の名古屋興行の番付(②)には嵐橋三郎の名が見える。この番付では書き出しに置かれ、



①弘化3(午)、2、28～清寿院（御園座蔵）



②嘉永5(子)、7、15～橘町（高麗屋蔵）

「加古川本蔵」「堀部安兵衛」「早野勘平」の三役を演じており、この興行の主だった役者の一人であった。この嵐橋三郎の出自はわからないが、坪内逍遙が『少年時に観た歌舞伎の追憶』[14]の中で「土着の老優」と記しているので、名古屋の地役者であったと思われる。

現在調査した番付では、嘉永元年(一八四八)六月よりの橘町興行から名が見える。弘化三年六月改の『張陽芝居惣者誉角力見立』には名が見えないが、『名古屋市史』風俗編の「明治七年より十四年頃までの俳優当地出身」には、中村宗十郎、沢村訥升に次ぐ三番目に「八百五十円十四故人嵐橋三郎」と挙げられている。また、嘉永三年正月刊『役者早料理』の「名古屋役者目録」に「吉次郎事嵐橋三郎」として載り、同四年正月刊『役者清榊葉』、安政四年(一八五七)正月『役者都名所』にも名が見える。これらから見ると、嵐橋三郎の名では、弘化年間にはまだ名古屋で活動をして居なかった。しかし、嵐橋三郎の名の初出する嘉永元年六月の興行は、江戸から来名した大川八蔵(二代目尾上多見蔵)を中心とする興行で、この時の番付(竹内文庫他)では上段に別枠で載り、「太平記兜競」の佐々木盛綱、「関取千両幟」の岩川次郎吉、「宿無団七時雨傘」の堺の大治を演じており、すでにかなり重要な位置付けがなされているので、これ以前から役者として、相当の実績があったのであろう。ところで、文化一〇年(一八一三)正月刊『役者出世噺』、翌年正月刊『役者繁栄話』の「名古屋役者目録」に「嵐吉次郎」の名があり、さらに、寛政一〇年(一七九八)三月稲荷、同一二年三月大須、文化七年三月稲荷、同一〇年一一月稲荷の番付、及び天保七年一月大須から嘉永元年一月若宮までの番付にもしばしば名が見える。『役者早料理』の

記事から、これらは橋三郎の改名前の足跡の可能性があるが、寛政一〇年から嘉永元年までは五〇年もあり、この後の活動期間を考えると、全てとは考えがたい。右の記録の中で文政年間が欠落していることを考え合わせると、天保七年以降の記録が橋三郎の前名と見てよいのではなかろうか。そして、嘉永元年一月以降に「嵐橋三郎」に改名したのであろう。改名の事情はわからないが、前述の坂東大十郎のように、大芝居役者と師弟関係を結んだのかもしれない。中村仲蔵の『手前味噌』[15]によると、嘉永三年正月、仲蔵は上坂の途上、名古屋に立ち寄り、そこで相宿した一組が「嵐吉次郎(この座の書き出し役者)夫婦、三四歳の幼児と乳母」で、その後ともに岐阜に行き、七代目団十郎と同座している。この時の番付(東京文化財研究所蔵)をみると、書き出しは「嵐橋三郎」となっている。したがって、両者は同一人物で仲蔵は前名で記していたということであろう。これ以降、橋三郎は明治以降も逍遙が記したように、老練な在地役者として活動している。『名古屋市史』に「十四故人」と注しているので、明治一四年に没したのであろう。ただ、嵐橋三郎は明治一五年以降も活動しているので、二代目がこの名を継承して活動していたことが知られる。

このように幕末の名古屋では、多くの在地の役者が芸と地位の向上を図り、一人前の役者として東西から訪れる人気役者と同座し、名古屋芝居の隆盛を支えたのである。

四、明治維新後の名古屋芝居と地役者

さて、名古屋芝居は慶応年間に入ると浄瑠璃興行ばかりで、歌舞妓興行はほとんど行われなくなった。江戸と京都の中間に位置して、交通の要所であった名古屋は、倒幕と明治維新の混乱で、慌ただしくなり、芝居どころではなくなり、名古屋芝居の繁栄を支えた東西役者の来名も困難になったことなどが機因していたのだろう。明治になり、東京が唯一の政治の中心地となって混乱が治まり始めると、名古屋芝居も活動を再開した。『勾欄類雑集録』[16]及び番付によると、明治二年(一八六九)、まずは大曽根阿弥陀寺境内坂下座で八月八日から、嵐璃珏、市川米十郎、大谷万作、嵐栄次郎、市川錦升、片岡松右衛門、市川市鶴らによる歌舞伎興行が始まった。八月二一日から二の替り、九月一四日から三の替り、さらに九月下旬に四の替りと、多少の役者の交代をしながら興行している。これらは上方役者の名だが、此の時、江戸に市川米十郎を名乗る者がいた他は該当者がいない。あるいは名古屋在の役者がこれらの名を名乗っていたのではないか。

翌明治三年になると、二月には広小路芝居で右興行にも出演していた市川市鶴、嵐徳三郎、尾上栄三郎、中村千登勢、中山一徳、嵐

璃光らが興行している。[17] 三月には大須、四月には若宮・清寿院でも興行が始まった。六月の清寿院芝居は三の替りまで行われ、変り番付が出されている。尾上梅幸、坂東重太郎、片岡我童など著名な名が見えるが、東京からやってきた役者に名古屋在の役者が加わった興行だったようだ。同じく六月の若宮は名古屋出身の役者中村宗十郎が出演していた。そして、閏一〇月、橘町裏芝居に小屋が新築され、町名を古袖町と改めて開場した。このこけら落とし興行は嵐雛助、嵐大三郎、市川小団治らを上方から招致し、在地の中山喜楽、坂東のしほ、河原崎河蔵らが加わった充実した座組で一七日から始まった。三の替り、一一月末まで多少役者を替えながら興行している。その後、古袖町芝居は継続的に興行した。明治四年三月からの興行は市川米十郎と市川九蔵、嵐吉三郎に在地の役者が加わった座組だった。さらに、八月には助高屋高助(四代目か。東京では此の時は沢村訥升を名乗っていた)も来名して加わった。こうして、再び名古屋に長期滞在する役者も現れ、名古屋芝居は活気を取り戻した。

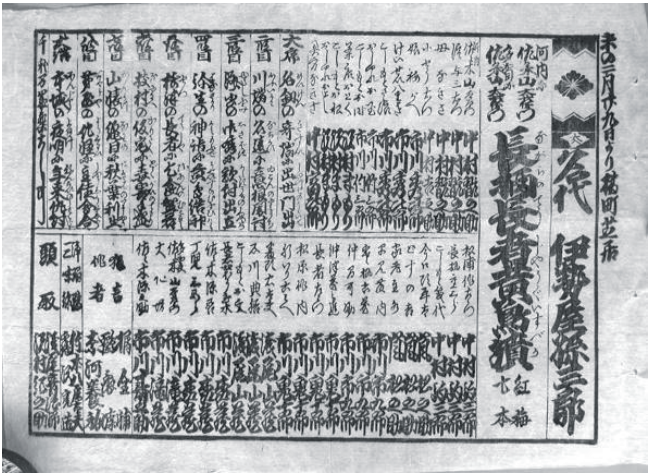
明治五年三月、若宮境内に末広座が新築され、中村宗十郎を招致して開場した。在地の嵐橋三郎、市川森蔵・森之助親子、中村仙昇などが加わった。九月には南外堀町元片端に千秋座が開場し、専ら女子供芝居が興行された。翌明治六年二月には堀川に金橋座が新築され、七月には本重町に新守座が誕生した。逍遙の『少年時に観た歌舞伎の追憶』によれば、「名古屋には前例の無い総瓦葺」の劇場で、中村七賀助(後の中村嘉七)、実川延若、嵐三右衛門、嵐大三郎、中村芝雀らに在地の中山喜楽らが加わった興行で、華やかに開業した。明治七年には三月に東主税町に相生座、武平町に千鶴座、八月には下園町に開園座が次々と新築された。さらに、明治一〇年八月には末広町に愛栄座も開場、翌一一年月には大須に宝生座が開場した。しかし、本格的な歌舞伎興行を行っていたのは、古袖町芝居(橘座・中村座)と新守座、それに末広座、愛栄座で、他は女子供芝居や浄瑠璃、うかれふし、俄といった芸が大方であった。それでも、一人前の役者のみならず、女芝居(芸妓芝居)や子供芝居なども含めて、在地の役者の活動の場が多くあり、東西から来名して長期滞在して、活躍する者も多かった。後の七代目市川中車が一二才で父とともに名古屋にやってきたのも明治四年であった。[18] 中山喜楽の客分となって、中山鶴五郎を名乗り、子供芝居で活躍した。

しかし、橘座・末広座は地の利の悪さや小屋の老朽化によって、次第に興行が減少し、名古屋芝居に変化が起こってくる。これに呼応するように、明治一〇年前後から上京或いは東京に戻る役者が多くなり、さらに、在地の役者の中にも東京へ進出する者が出てきた。前述の中車が明治一三年、二一歳で上京し市川八百蔵を襲名したの

は象徴的出来事であった。上方にも名古屋と同様に上京する役者が多くなり、大歌舞伎の急速な東京集中が進んだ。そしてこの後、東京から訪れる役者は、長逗留はせず、短期間の興行を終えると戻ってしまうようになった。幕末から明治初年にかけて、長く逗留する東西役者が在地の役者と同座して刺激を与えたり、師弟関係を結んで役者を育てたりしたのだが、この体制が崩壊することになってしまった。それまで上方との結付きが大きかった在地役者だったが、大歌舞伎への進出や新たな活動の場を求めて上京し、東京の大名題の役者の弟子となる行動をとる者が多くなっていったのである。

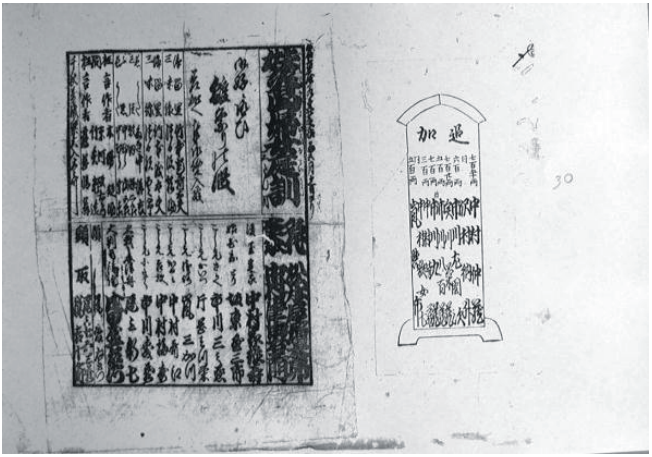
五　市川森蔵と尾上幸十郎親子

天保六年(一八三五)二月二九日より橘町芝居で一年間興行した市川寿之助を座頭とする子供芝居に市川森蔵という名が見える(番付③)。翌々年の同じ橘町での尾上多見助の子供歌舞伎一座にも同年一〇月一一月の若宮での浄瑠璃による首振り芝居にも市川森蔵は参加している。この市川森蔵は、この後、天保一二年(一八四一)四月～六月橘町の浅尾大吉一座に出勤して以降、弘化元年(一八四四)三月四月若宮の嵐橘二郎一座、同二年正月中旬～七月橘町の中山喜楽一座というように、ほぼ毎年、橘町又は若宮、清寿院芝居に出勤しており、役者評判記の嘉永二年(一八四九)正月刊の『役者産物合』から安政五年(一八五八)正月刊まで「名古屋役者目録」に名が見える。嘉永七年五月一一日よりの若宮の七代目団十郎の興行の「妹背山婦女庭訓　雛祭りの段」にも出勤しているが、役割は「こし元小きく」であった(番付④)。幕末の文久二年(一八六二)一一月清寿院



③天保6(未)、2、29～橘町（高麗屋蔵）

の中村竹三郎一座の「仮名手本忠臣蔵」に出勤した時も「丁稚仔吉」「下女おりん」「荷物三木平」を演じている。市川森蔵は子供芝居から名古屋で成長し、天保末年以降の幕末の名古屋芝居で脇を支え続けた役者であったことが知られる。



④嘉永7(寅)、5、11～橘町（御蔵園座蔵）

明治になった後も、明治三年(一八七〇)一一月一〇日よりの古袖町芝居開場興行(番付⑤)から参加し、明治五年(一八七二)四月二九日よりの末広座開場興行にも参加、その後はほぼ毎年両座に、新守座、愛栄座、宝生座が開場した後はこの三座に出勤しており、幕末に変わらぬ活動が確認できる。『名古屋市史』風俗編の「明治七年より十四年頃までの俳優当地出身」にも嵐橋三郎に次ぐ四番目に「八百円　市川森蔵」とあり、明治の名古屋芝居を支えた名優として知られた中山喜楽[19]より上位に位置付けられている。また、「中車芸話」には「名古屋の劇団で指折りの三枚目」と評されている。森蔵は脇を固める役割を演じつつ、明治九年五月新守座の興行では座頭を勤めるなど、一座を率いる役割を担うようになっていた。明治一五年一一月一二月の尾上松鶴一座では、庵枠で挙げられ、別格の扱いとなっており、名古屋芝居の重鎮というべき存在だったように思われる。

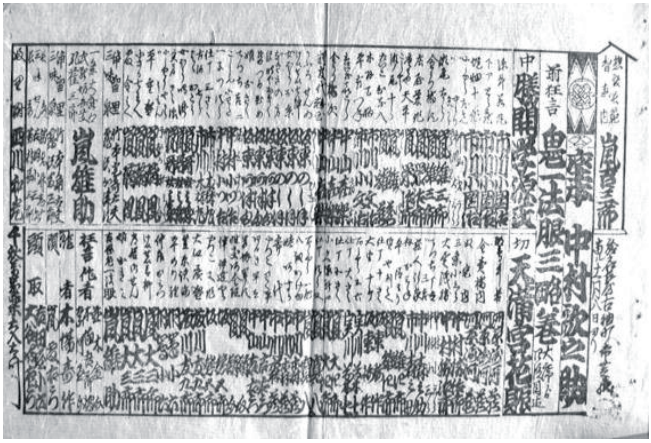
ところが、明治一二年以降は、急に、出勤の記録が少なくなり、その一方で、明治一五年四月二五日よりの横浜吉田町蔦座「小栗外伝操花競」「(唄浄瑠璃)露濡縁糸萩」、続く五月二〇日よりの同座「昔様式伊達模描」「誠諭恋曲者」「和解睦会莚」にも市川森蔵は子息市川森之助とともに出勤している(横浜開港資料館蔵番付)。さらに、明治一七年一月、同年一〇月二一日よりの蔦座の興行にも参加

している。これについて、『近代歌舞伎年表名古屋篇』には次の二つの新聞記事が引用されている。

「根生の市川森蔵・同森之助の親子は、一昨年以来横浜へ行き湊座の座頭となつて中々評判よく地付役者の様に成つて居たが、産れ故郷はどうして宜いか、当時東京へ出て一興行して居る、そこを打上げ次策本区へ帰宅しお懐しさの御目見得興行をするとの話しが出来ましたとか。」（『絵入黄金新聞』明治一九年五月三〇日）

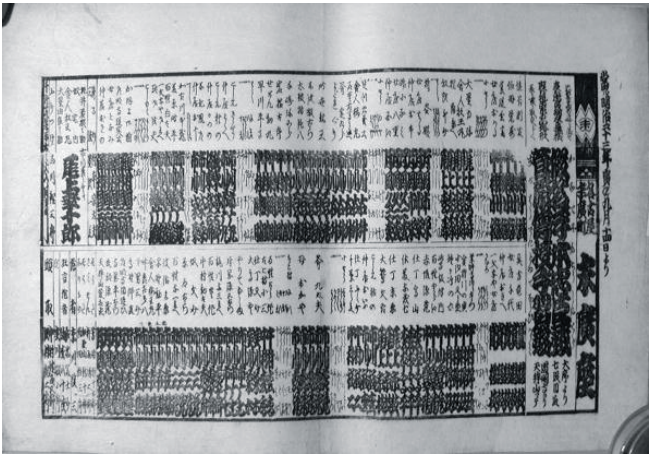
「名古屋役者の腕コキと昔役者に舌を巻せた事がある市川森蔵は、悴森之助と倶に横浜へ往き、蔦座の座頭に為つて居た後東京へ移り、森之助は音羽屋の弟子に入り尾上幸十郎と更ため檜舞台を踏ませた勉強、その効あつて俳優一人となつたを土産に今度久し振りに帰県し」末広座で興行する。（『金城新報』明治二三年八月二三日）

この記事では、市川森蔵と森之助親子は明治一七年から横浜へ行き、蔦座の座頭となっていたというが、番付を勘案すると、明治一五年四月五月に横浜蔦座に出勤して、一旦帰名し、明治一五年一一月の末広座、宝生座、一二月には新守座に出勤、さらに、一七年四月の末広座まで名古屋で活動し、その後、再び横浜に行ったということであろうか。その後、東京に移ったというが、『続々歌舞妓年代記』によると、確かに、明治一九年六月二八日よりの中村座「高座開復讐美談」「三五夜中色新月」「姫小松子日の遊」、同年一〇月二一日よりの「日蓮大士真実伝」「新女房中由兵衛」に森蔵と森之助親子は出演している。この年、二人が東京に移ったことを裏付けている。



⑤明治3（午）、11、8～古袖町（架蔵）

そして、『金城新報』の記事によれば、明治二三年帰名して、名古屋の舞台に立った事になる。明治二三年（一八九〇）九月四日より末広座の「増補尼子十勇士」「八幡祭礼夜宮賑」に市川森蔵と市川森之介事尾上幸十郎は出勤した。九月一四日より二の替り「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」が出され（番付⑥）、森蔵は「斧九太夫」「母おかや」を演じている。これが森蔵の最後の舞台であった。『近代歌舞伎年表名古屋篇』に、



⑥明治23（寅）、9、14～末広座（架蔵）

「故父市川森蔵が生前の願ひ、どうか故郷へ戻って死にたいといふ愈慮を満足させんと孝心深くも修行中を棄て、昨年帰国した森之助事尾上幸十郎は果たして父が満足より張った心もくづ折れてや、願望通りに当地で死去し法事万端十分なせし上は（中略）再び師匠音羽屋を慕ひ此頃上京なしたり…」（『金城新報』明治二四年一月二四日）

とあるので、森蔵は明治二三年末には亡くなったようだ。

次に、右の記事に繰り返し登場する子息の尾上幸十郎の動向を見ておきたい。前にも少し触れた「中車芸話」に次のような記事がある。

子供芝居の役者としては、座頭が森丸、書出しに由丸、この由丸というのは今の芝鶴の父親で、後に伝九郎となって亡くなった人で、一座の太夫元のようなことをしていた、江戸兵の悴でした。また座頭の森丸は、当時名古屋の劇壇で指折りの三枚目、市川森蔵の次男で、右森丸の兄貴を森之助といい、後に東京へ来て菊五郎さんの弟子になって、尾上幸十郎と言っていました。

その後、伊勢の津へ子供芝居が巡業に行った時に、右の森丸

が急病で死んでしまって、私が後釜（あとがま）に据えられたのですが、これはいわば座頭心得とでもいうところです。

右の話から、市川森蔵には二人の子息があり、森丸は明治初年頃の子供芝居の座頭格で活躍していたが早世したこと、長男が森之助で、上京して菊五郎の門に入り尾上幸十郎と改名した人であったことが知られる。

市川森之助の足跡を番付等で辿ると、明治三年（一八七〇）一一月古袖町芝居の三の替り「大岡仁栄録」「娘景清八島日記」「源平布引滝」に父森蔵とともに参加している。[20] 森丸はこの頃には子供芝居だったが、森之助の方はすでに成人していたようだ。この後、明治四年の出演記録は見出せないが、明治五年以降、ほとんど父森蔵にともに行動し、同じ舞台に出勤していた。『名古屋市史』風俗編の「明治七年より十四年頃までの俳優当地出身」には、七番目に「七百五十円　市川森之助」とある。明治一四年頃には一人前の役者に育っていたことが窺われる。『近代歌舞伎年表名古屋篇』では、『歌舞伎新報』二九九号（明治一九年四月一七日）と『愛知新聞』三月一一日付の「宝生座に於て例の市川森之助始め其他当地大根株の一座を近々開演するとのこと」という記事を根拠に、明治一六年（一八八三）四月八日より末広座で市川森之助一座が「加賀見山」「妹背山」「鈴木主水」を上演したとする。これによれば、この時期、森之助は一座を率いていたが、「当地大根株の一座」との表現から、所謂名古屋を根拠地とする小芝居あるいは旅芝居一座だったのではないか。しかも、森之助の後には父森蔵が常に付いており、実質に一座を取り仕切っていたのではないか。『近代歌舞伎年表名古屋篇』は七月下旬にもこの一座は末広座で興行したとする。これ以降、森之助は明治二三年九月、尾上幸十郎で登場するまで、名古屋で名が見えない。

明治一五年、森蔵と森之助親子は東上し、横浜の蔦座に出勤し、一旦戻って、名古屋芝居に出て、再び蔦座、明治一九年から東京中村座に移ったことも、全て父と一緒だった。しかし、明治二〇年一月以降は森之助一人で中村座に出勤し、七月からは五代目尾上菊五郎に従っている。前述の『金城新報』や「中車芸話」にいう如く、菊五郎の弟子になったのであろう。明治二一年も同様に東京で菊五郎に従い、六月の中村座から尾上幸十郎を名乗っている。幸十郎と改名の後、七月には千歳座、一〇月には吾妻座、一一月は市村座というように、東京の主だった劇場に出勤し、菊五郎のみならず九代目団十郎や市川左団次らの芝居を目の当たりにし、芸を磨いたのであろうが、明治二三年六月に新富座に出勤したのを最後に東京の記録から消えている。森蔵のところで見たように、父森蔵の故郷へ帰って死にたいという思いを汲んで、親子共々名古屋に戻ったのである。

名古屋に帰って、明治二三年九月末広座で、親子とも久々の名古屋の舞台に立ったが、父森蔵はこれからそれほど時を経ず、亡くなったのである。一人になった幸十郎は、明治二四年には片岡松童一座や梅村梅昇一座に参加し、番付には別枠で載っていたが、上京の思いは止まなかったらしい。前に引用した記事の他にも、『近代歌舞伎年表名古屋篇』には次のような記事が見える。

「故郷忘じ難し親森蔵が生前にどうか死ぬなら産れ故郷の名古屋へ戻つて死にたいと言つて息まぬを気の毒がり、又と得難き父親が望ぞみを断然果させんと修行盛りを孝にかり親方の許しを得て名古屋へ帰へるやカツカリと満足の大往生、父森蔵は目出たくも素願通りに名古屋の土となつたは実に自分まで本望なりと悦こんだ幸十郎、成らう事なら自分も故郷に地づきて父が亡き塚へ始終香華が手向けたいと併せて多き知己に別れて去るを名残におしみ辛抱をして居たものゝ、何分にも芝居の下落名古屋の興行も世が末となつてどの座へ出るも十日保たず中には三日が六づかしい大コケさへもある斗りか、給金の不充分其不充分な給金さへ不渡り勝ちや休業がち(中略)愛郷心にからまれ居ては腮の釣り上げ(中略)親方の許へ到つて今一勉強するが一己の両得なりと此頃断然決心したに付近日再び東京へ乗り出すとのこと(中略)名古屋に居ては冗目〳〵」(『金城新報』明治二四年九月一九日)

この記事の如く、九月の末広座への出勤を最後に、明治二九年まで名古屋の番付には名が見えない。一方で、翌明治二五年一二月から二六年にかけて歌舞伎座の番付に幸十郎の名が見える。幸十郎は再び上京したのである。一二月の「仮名手本忠臣蔵」では「梶川与惣兵衛」、七月の「黒手組一対白鞘」では「小笠原長清／藪坂番六」を演じるなど、精進していたと思われるが、明治二七、二八年の動向は確認できない。

明治二九年三月二二日よりの宝生座の中村駒之助、中村伝五郎、片岡松童、中村小伝治一座に「梅幸門弟尾上幸十郎加入」という形で参加している。東京役者の一座の一員という位置付けだったようだ。この後この一座は分座して、各地に廻って行ったが、幸十郎はそのまま名古屋宝生座に残り、四月五日より在地の幡谷・鯉之助と一座を組んで「肥後の駒下駄」を演じた。好評を得て、一〇日からは熱田蓬座に移って同外題、座組で出勤、五月六日からは再び宝生座に戻り、同じ座組に東京から来た市川右田作と嵐璃幸が加わって興行している。六月下旬には再び中村伝五郎と組んで多治見で興行、八月中旬には名古屋に戻って、同じ座組で音羽座に出勤している。多治見と名古屋出勤の間は近郷を廻っていたのであろう。これ以降翌年の三月までの足跡が辿れないが、三月は名古屋宝生座に出ている。

四月には一宮町東座に出ており、その後三一年一月まで動向がわからない。一月に、前年開場した御園座にようやく出勤している。市川市蔵・中山喜楽の一座に加わったものであったが、前年八月から九月に師匠の菊五郎が御園座に来名した時には幸十郎は参加していなかった。二九年三月に帰名して以来、名古屋を拠点として活動するようになり、大歌舞伎の舞台とは異なった道を歩み始めていたということであろう。この後も大正期まで、幸十郎は、末広座を中心にほぼ毎年名古屋の小屋に出勤、その間に時折近郷を旅巡業、という活動を続けていたことを番付や新聞、雑誌記事から辿ることができる。

六　明治期の名古屋芝居の変容

市川森蔵と尾上幸十郎父子の足跡を辿ると、明治年間の名古屋芝居の動向が如実に浮かび上がってくる。明治初年は、維新の動乱で衰微した名古屋芝居が、幕末に上方役者との結付きから蓄えた力によって、復活する姿をみることができる。幕末も明治初年も、上方役者が繰り返し来名した。その役者の脇を固め、即座に舞台を作ることのできる在地の役者達が数多く育っており(市川森蔵もそういった役者であった)、名古屋は興行しやすい場所だった。名古屋の観客は目がきびしいとされ、上方役者も格好の修行の場と捉えて長期逗留し、その間に在地の弟子を育てることにも力を注いだ。こういった芝居隆盛を支える形態がうまく機能していたのである。

ところが、明治一〇年ころになると、上方役者の東京移住が顕著になり、大芝居の東京集中が始まり、名古屋に逗留していた役者も東京へ移ってしまった。これ以降、上方から役者の来名が減少し、東京から来名する役者は短期間の舞台をこなすとすぐに帰ってしまった。地役者を加えて座組して興行する形態も少なくなり、地役者たちは活動の場も研鑽の場も失った。そこで、地役者のみで一座を組んで興行することになったが、人気役者のいない一座は、右の『金城新報』の記事ではないが、数日から一〇日ほどの短期間で、少しずつ座組や演目を替えながら小屋を渡り歩くような興行しかできなくなり、旅興行もせざるを得なくなった。木村錦花が「その時分に純粋な旅役者のでたのは、東海道では名古屋、東京近在では上州に多かったのです。」(「旅芝居今と昔　鱗花芝居のことなど」『演芸画報』昭和九年九月)と述べているが、名古屋芝居のこうした事情が数多くの旅一座を生み出したからである。地役者やその子弟たちの中には、東京に出て大歌舞伎役者の弟子となり修行を積む者も出た。そうして大歌舞伎で活動の場を見出す者もあったが、多くは尾上幸十郎のように、名前を貰って帰り、名古屋の小屋と地方廻りを組み合わせて活動する地役者となった。彼らは東京から訪れる小芝居役

者と同座することはあったが、大芝居役者とは同座することはなく、劇場も大芝居を上演する劇場と、地役者が出演する小屋とは区別されるようになり、明治二〇年頃には名古屋芝居は明治初年までの形態とは全く異なったものとなってしまった。

注

(1) 延享元甲子秋、立錐軒如儂著。蓬左文庫蔵本によった。

(2) 小寺玉晁編。名古屋叢書風俗芸能編(2)所収のものによった。

(3) 桑山好之著、天保末年〜弘化頃成立。名古屋叢書地理編一〜三所収のものによった。

(4) 朝日定右衛門(文左衛門)の日記。名古屋叢書続編第九〜十二巻所収のものによった。

(5) 伊勢屋忠兵衛自筆、京都大学附属図書館蔵本によった。

(6) 守屋毅『近世芸能興行史の研究』(一九八五・九　弘文堂)

(7) 小寺玉晁編。名古屋叢書風俗芸能編(2)所収のものによった。

(8) 猿猴庵高力種信の日記。名古屋叢書三編所収のものによった。

(9) 霞亭文庫蔵『近世伎史』第一編九巻所収。『名古屋市史』風俗編に翻刻。

(10) 国立劇場芸能調査室編の〈歌舞伎の文献8〉所収のものを用いた。猶、内題は「三都役者世代の接木」。

(11) 池山晃「天保改革後の名古屋歌舞伎」(『近世文芸』五〇　一九八九・六)

(12) 拙著『地方芝居・地芝居研究―名古屋とその周辺―』(二〇〇九・二　おうふう)第一章八。

(13) 役者評判記はいずれも石水博物館及び愛知教育大学附属図書館所蔵のものによった。

(14) 坪内逍遙『少年時に観た歌舞伎の追憶』(大正九・一二　日本演芸合資会社出版部)

(15) 郡司正勝校注『手前味噌』(一九六九・一一　青蛙房)によった。

(16) 小寺玉晁編。名古屋市史資料本によった。

(17) 明治以降については、特に断らない限り『近代歌舞伎年表名古屋篇』をその典拠となった番付を参照しながら用いた。

(18) 市川中車「中車芸話」(『日本人の自伝』20　一九八一・八)

(19) 三代目中山喜楽については、拙著『地方芝居・地芝居研究―名古屋とその周辺―』(二〇〇九・二　おうふう)第一章八に詳述した。

(20) 天保八年(一八三七)七月一日よりの橘町子ども芝居に「市川森之助」の名が見えるが、父の市川森蔵がまだ子供芝居に出ていた時期であり、これは別人であろう。

追記　本稿は二〇一〇年度科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)による研究成果の一部である。